

## 新「二つの文化」論序説

松 浦 俊 輔

C・P・スノウが「二つの文化」に関する講演を行なったのは一九五九年のことである。一九五七年、西側諸国が宇宙開発でソ連に思いもかけない後れをとり、科学教育の重要性が声高に言われるようになった、いわゆるスプートニク・ショックの余韻もまだ冷めぬ頃と言っている。もちろんイギリス人スノウとしてみれば、ソ連に対する後れもさることながら、後れをとりながらも、追従してみせたアメリカの技術力との開きも気になるところだったに違いない。『二つの文化』の中で参照基準とされるのは、あくまでも米ソ両国である。そして冷戦は、とにもかくにも競争をおおることができた。それゆえに科学技術は求心力をもちえた。しかしそういう求心力は、今では期待しにくいという事情がある。最近のアメリカにおける超伝導超粒子加速器（SSC）の建設中止も、そういう流れの中に位置づけられるだろう。しかし逆に、ヨーロッパでは、大型ハドロン衝突器（LHC）の計画推進が、アメリカにとってかわる粒子物理学の中心の地位を担うという方向で説得力をもつようになっていくという面もある。ソ連とアメリカの抜けた穴を埋める形でのヨーロッパの台頭で、少しはスノウの気も晴れるのだろうか。

ミシェル・セールによるヘルメス・シリーズの第一巻『コミュニケーション』は、六〇年代の日付のある文章を集めたものである。いちばん新しいものは、一九六八年一月となっている。そして一本として出版されたのは一九六九

年。もちろん、六八年五月を経て、新しい知の方向が模索されていた時期である。知の解体が知の総合を要求していた。六八年五月という（一つのシンボルとして）解体に向かっていた知の、その後の再生の方向をセールは予言していたのかもしれない。そしてセールの「予言」はある意味で当たっていると言える。ネットワークはハードウェアとしてはあたりまえになり、ソフトウェアとして見ても、ハイパーテキストや、ネットワーク上で共有される知という形で、直線的で個人的な（あるいは触通のきかない孤立した）テキストを乗り越えようとしている。しかしそれでセールは満足できるのだろうか。

スノウの提言から三五年、セールによるヘルメスの第一歩から二五年（最終巻の『北西航路』からさえ、すでに五年が近い）を経て、事態はどうなっただろうか。科学技術は着実に成果をあげた。しかし、相変わらず科学技術の側は世間の無理解を嘆き、世間の側は科学技術の先行を危惧している——もっとも、世間の意向と、科学の成果を両者とも、（こっそりと？）利用しあってもいるのだが。そこに総合も宥和もありえないのだろうか。「理工系はなれ」が激しいと言われる現代は、スノウが危惧を抱いていた当時と、ある意味では同じと言っていい状況がある（もちろん、「理工系はなれ」は当のイギリスでも事情は同じである）。

そして、科学的な知は、むしろますます隔離され、人々の手の届かぬところへ遠ざかっているかに見える。「北西航路」はまだ見つかっていない。「二つの文化」は相変わらず隔離され、あるいは対立してさえいる。この古い問題は、繰り返し取り上げられなければならないと思われるし、本稿もその一つの試みへの出発点である。

## 科学をめぐるいくつかの言説

ともあれ、スノウの有名な（それゆえ問題もはらむ）一節をはじめとして、いくつかの証言を見てみよう。

私は何度も、伝統文化に関する水準からすると、高い教育を受けていると思われる人々の集まりに出たことがあります。その人たちは、かなりうれしそうに、科学者の無学さに対する不信を語っていました。何かの折りに、私は耐えきれなくなって、その場の人たちに、ここにおられる中で何人の方が熱力学の第二法則を説明できますかと聞いてみたことがあります。反応は冷たいものでした。つまりできないということでもあったわけです。ただ、私が聞いていたことは、シェイクスピアを読んだことがありますかという質問に、科学の世界で対応するレベルのことだったんです。今では、私をもっと簡単な質問——質量あるいは加速度とは何でしょうかというような、科学では、字が読めますかという程度の質問をしていたとしても、その高等教育を受けた人々の中で、私が同じ言語を話していると感じた人は、一〇人のうちせいぜい一人くらいしかいなかったんじゃないかと思っています。そのくらい現代物理学という構築物は進んでいて、西洋の世界の最も知的レベルの高い人々の大多数でも、それについては新石器時代の頃の先祖と同じ程度の見通ししかもっていないということなのです（C・P・スノウ、小説家）<sup>2</sup>。

物理学の教育を受けて、経済界に進み、小説家としても活動したスノウとしてみれば、ごくあたりまえの疑問とも言えるが、大事なのは、スノウがなぜこういうことを言おうとしたのかということだ。つまり、それほど当時のイギ

リスでは、科学者、技術者は、格下の扱いを受けていた（あるいは科学者・技術者がそう感じていた）ということだ。「二つの文化」という名のもとで、科学を一方の文化とすることにさえ、当時は抵抗、反感があったことがスノウ自身によっても報告されているし、それ以外の人々によって、次のような認識も示されている。

文芸と科学の間の二元論は資本主義体制下における精神労働と肉体労働の根本的な分離をそのまま反映しており、それがまたエリートには教養、大衆には読み書きという考えに表現されている。それというのも、社会的には資本主義は手仕事を蔑視しなければならず、したがって必然的に手仕事に関係するものには、すべて低級な価値しか与えなかったことによるのである。これこそ古典的教育が科学教育よりも神士の教育にふさわしいと考えられていた（現在でも多い）理由である。これが極端な形をとってわが国で現われているのが、いまなお執拗になされている仮定、つまり未来の指導者にとって最上の教育はオクスフォードの「グレート・コース」であり、科学のコースは専門化された科学的な仕事——社会的にはそんなに重要なことではないというのだ。——をしようとする人びとのために用意されているという仮定である（マックス・モリス、マルキスト）。

それはイギリスの古い伝統だ。人文系の人々が文明の担い手と見なされ、科学者は、請負業者と見なされてきたのだ（マックス・ペルーツ、分子生物学者）。

軽合金産業につとめている金属学者が、彼の直属の上役で未来のことに夢中になっている経理家が世界を

どんなふうにも夢想し、未来の脅威をどんなふうにも想像しているかを私に語った。彼は私のその友達に、「われわれが諸君に求めるものは、マグネシウムの軽さと鋼鉄の強さもあわせもった金属をつくりだしてもらおうことだ。そしてそれは造作もないことだ」と語ったそうである。友達は笑っていたが、実際には笑いごとではなかった。その経理家は、自分の要求が不可能であることを、金属学者の説得ではなんとしても承服しなかったからである（ウォルター・アレン、建築家）<sup>5</sup>。

このような認識は根強く、先のスノウの言葉を含む、「二つの文化と科学革命」という講演が行なわれたのも、そういう伝統的な認識を背景としている。科学も文化の一部であることを力説する声は、スノウだけでなく、科学者の側からも当然出てくる。

科学は文化の一部である。文化とは、美術や音楽や文学だけではなく、この世界が何からできていて、どう機能しているのかの理解も文化なのだ。星や、物質や、化学について、なにがしかは知っているべきだ。化学は好きではないとよく言われるが、我々はいつでも化学を扱っているのだ。人は熱がどういふものかを知らないし、水がどういふものかほとんど知らない（マックス・ペルーツ）。

こうした感想は、それほどまでに科学の文化的価値が認められていなかったということを示している。もちろん、そういう「科学技術蔑視」は現代、表面的にはなりをひそめている。ただなりをひそめている分、問題はむしろ水面下でわだかまるものかもしれない。現代社会における科学技術依存的な側面が表面を覆い、ある意味で科学技術

の側が「逆襲」しているかのような状況であればこそ、「人文的教養」が科学技術蔑視を強めるということである。ともあれ、あるいは経済的な支配を通じてであれ、あるいは「第二」の文化としてではあれ、科学は文化としての認知を受けている。それにもかかわらず、科学者は似たような発言を続けなければならない。

自分が自分の暮らししている社会にうまく適応していると思うなら、そこには、その社会がどう働いているか、それがどう進化してきて、それがどう動いているかについてのある水準の理解が含まれるはずだ。中世やルネサンスの初期に生きていたとしたら、科学については何も知らなくても、十分うまく暮らせただろうが、今日では、科学について何も知らなければ、その社会に参加することは非常に難しくなる（ジャン・パトリック・コンラッド、原子物理学者）<sup>7</sup>。

こちらの発言は、現代の「理工系はなれ」という現実との関連で読まなければならない。つまり、科学は文化としての認知は受けても、今度は、縁遠い文化になってしまったということだ。

### 断絶のありか

断絶、あるいは通信途絶は、いたるところにある。科学と非科学、専門家と世間、人為と自然、理念と現実、社会と個人、あるいは個人と個人など。その断絶とは、おそらく、一方の本来のあり方を追求すれば、必然的に他方が成り立たなくなるといふ類の断絶だ。科学技術と世間の関係も、その一つだ。といって、必ずしもその両者は全面的に

不連続なわけではない。つまり、投影のしかた、座標軸のとりかたによって、断絶していると見えたり、連続と見えたりすることがある。また、仮に科学とそれ以外という区分を立てるとすれば、そういう区分の立て方そのものが、科学を特権化することにもなる。ただ、科学とそれをとりまく社会という区分は、現代という現実の中では、代表的な一つの区分のとり方と違っていいだろう。だから、筆者は、科学の特権化には注意を払いながら、その断絶の面を見て、そこに比較や総合の軸や足場をとりたいと思う。

しかしその隔離は根が深い。しかも、それは、いわゆる理工系の中でさえ生じつつある。単に専門領域の細分化というようなことではない。理工系の門をくぐる学生さえ、科学の部外者になりつつあるというレベルのことだ。「理工系ばなれ」とは、何も学生が集まらないというだけのことではない。科学的なものに対する関心がもてない、あるいは不信さえ抱いている学生に、理工系の将来が託されているかに見える現実のことなのだ。

もちろん信じればよいというものではない。科学技術に万能を求め、バラ色の未来を見よというつもりはまったくない。先程触れた、ある「経理家」の要求のような、科学技術万能論もまた、科学技術蔑視の裏返しであり、そういう感覚も、現代にいたるまで、脈々と続いている。「現代の発達した科学技術の力をもってすれば、かくかくしかじかのことが不可能とは思えない」といった発言は、これまた一つの紋切り型として、あちこちで顔をのぞかせている。言うまでもなく、健全な懐疑はもつべきなのだ。ただ、現実の「理工系ばなれ」という現象が、そのような健全な懐疑にもとづいたものとは、到底信じられない。言わば科学の対極にあるオカルト的なものは、さほど懐疑も感じずに受け入れられ、信用されているかに見えるからだ。

理系の学生に永久機関の話をするところがある。話す側としての意図は、エネルギー概念とか、熱力学が固まる以前に、ただ機械の発達という現実だけがある状態では、永久機関はそんなに荒唐無稽なことと考えられたわけではなく、

改良すれば何とかかなりそうなものとして構想され、目指される。あるいは熱力学が確立しても、当の熱力学の法則は、証明されることではなくて、ある体系の前提として要請される公理だから、その公理を受け入れなければ、永久機関は、確率は低くても何とかなる、確率が低いからこそかけてみる値打ちがあるんじゃないかと思わせるだけの力がある。話す意図は、そういうところにある。理系の学生であれば、おそらく熱力学の法則が教えられ、かなりの程度、自明のこととして受け入れられているであろうという前提のもとで、そこに、それこそ健全な懷疑を注入したいというつもりで話す。ところが、学生のほうは、まじめなのか冗談なのか、永久機関は可能な気がするとか、あるいはこれからは、自然を大切にするために、永久機関を考えるような方向に進むべきではないのかなどと感想を書いたりする。

それを「夢がある」と言うことはたやすい。あるいはそこに、まだ毒されていない健全さを見ることが可能だろう。ただ、あまりの素直さに、かえって心配になってしまふところもある。「月にうさぎがいないことがわかって、また一つ夢がなくなった」というような、テクノロジーに対する紋切り型の詠嘆があるが、むしろ「月にはうさぎがいない」と確固として言えるようになるところにこそ、科学の「夢」があるはずだ。科学技術の門をくぐっているはずの彼らに、むしろ外の世界の曖昧な夢が相対化できていないということだとすれば、それはそれでやはり「健全な懷疑」とは次元の違うところにいることになる。

ただ、現代の不幸は、「月」や「うさぎ」のように、すぐに目につくようなところでは「夢」が見られなくなっているということだ。未知が希望であった頃、未知が手の届きそうなところにあった頃からは、ずいぶん遠くへ来てしまっている。現代科学で夢を見ようとすると、それなりに手間がかかる。宇宙の始まり、物質の根源、生命の起源、遺伝子の解明、いずれをとっても、夢の名には値する。しかし、科学がやっていることをそのまま理解するには、資

金、技術（数学という言語から、コンピュータを含む機械装置の扱いまで）、時間、いずれにせよ、手間がかかる。と言って、結果だけとれば、語っている対象の深遠さは宗教的であり、用いられる用語のあやしさは、秘儀的な呪文であり、外から結果だけを見るかぎり、あるいはイデオロギーとして頭からふりかざされるだけなら、信じる／信じないで語られる、流行としてのオカルトの世界とさほど径庭はない。

そして現実には、理工系の大学である本学の生協書籍部を見れば、一般の書店と同様、オカルトものがはやっていらしいことがうかがえる。それは、先に触れた、永久機関があやしげなものとして退けられてさえない理系の学生が、そんなに少数ではないということと、軌を一にしていると思われる。何も科学者たるもの、オカルトなどはなっからばかにしろとまで言うつもりはない。ただ、科学の世界に入ろうとしている人にさえ科学を信じられないところがあるということは言えそうだ。科学の危機とか、理工系ばなれといった事態の根源は、おそらくそこにこそあるのだろう。そこを無視して、単に学生が来やすいようにしても、おそらく科学になじめない理工系の学生を増やすだけのことにしかならないだろう。

### 科学的言説の構造

それほどに浸透している断絶は、やはり「二つの文化」の存在を示していると言わざるをえない。筆者は自然科学の、ある意味ではイニシエーションのための本をいくつか翻訳しているが、それを読んでくれるような読者は、そもそもそんなイニシエーションは必要のない人々かもしれないという無力感にとりつかれることがある。筆者が訳したような本を、本当に読んでほしい人々は、そういうものには見向きもしないのではないか。筆者にそう思わせるよう

な断絶が確かにある。それは、かつて言われたような文芸と科学技術といった区分ではないかもしれないが。ただ、そういう文化の断絶の問題は、現代において、十分考察に値するものだと思う。

そこで一つ問題として考えられることは、この断絶が、原理的なものなのか、それとも理念的には乗り越えられるのかということだ。この序論の段階での筆者の予断は、おそらく原理的なもの、あるいは構造的なものということだ。科学を精密にしていくということは、畢竟、対象を限定し、自己の領分に属さないものを排除・疎外することになる。だからこそ、「フィジックス」は、ただの自然学、言葉どおりの「物理」学から、現代物理学の姿へと限定され、特化されてきたわけだ。

そういう科学の歩み方からすると、先程触れたような、理工系の大学の生協書籍部でもオカルトものが売れるらしいというのは、ある意味で当然ということになってくる。

たとえば、虫の報せという現象を考えてみよう。これを「合理的」に考えれば、いくつも感じている予感の中から、たまたま当たったものを取り上げ、印象に残しているだけということになるかもしれない。そういう意味では、誰にでもある、「自然現象」の一つの解釈のしかたなのだ。しかし、「客観的」にはそうであっても、本人の物語化の本能が、その解釈を拒否する。本人にとって大事なものは、他とは違う、その時の虫の報せである。それこそが、隠された「私」のものとしてのオカルトのオカルトたるゆえんである。共有しえない、だからこそかけがえないというわけだ。その点は、もともと科学とは相容れない。科学は「私」を排除する形でその「客観性」を確保してきたからだ。「夢」は、物語化と裏表である。「私」に受け入れられる（ひいては語りうる）物語こそが「夢」なのだ。とすれば、科学はつまらないという印象になるのは、ある意味でやむをえない。科学の予測と占いの予言を比べたとき、受け取る立場からすると、とことん「私」のことを語ってくれる占いに科学が負けてしまい、科学には夢がないという烙印

を押されてしまうのは、当然すぎるほど当然と言える。

近来急速に展開されている、複雑さの科学であれば、たとえば経済的なニーズというようなレベルでは、個人的な対応を可能にするかもしれない。しかし、それはあくまでも、マーケティングの対象としての個、製品開発や在庫管理の項目としての個別性であって、科学であるかぎりには、数値化されたシミュレーションあるいはデータ処理が可能な対象ではあっても、「私」という本来の意味での個とはなりえない。と言うより、個人的なことを文字どおり個人的なまま客観的に語ることは無理で、その客観的には語り得ない部分を、率直に語り得ないとして切り捨てたところにこそ、科学の価値があるのだ。

ところが、一方では、オカルトを安易に共有、客観化しようとする——時には科学の名のもとに——のも現代である。それと並行して、科学の側から、科学の原理を普遍化しようとする動きも出てくる。オカルトの流行というのは、皮肉な見方をすれば矛盾した現象である。たとえば、本来、私個人のものでしかないからこそ大事な体験だった「虫の報せ」を、個人的なものとして秘匿することができず、「客観化」対象化して再確認したいという欲求に他ならない。そこにも断絶の根がある。逆に、根は次のようなところにもある。

人の生まれかわりも絶対がない。死んだ人が焼かれると、人の体を構成していた原子は一夜にして中空にばらまかれる。死後三年ぐらいうると、原子は地球全土に散らばる。そうすると、私が死んだあと、私の原子がたとえばイタリアに全部再び集まって、生まれてくる子供に結集するなどということは、エントロピー増大の法則から絶対がない。従って前世はない（大概義彦、物理学者）。

これは、科学に対する信仰告白ではあっても、前世がありえないことの証明にはなっていない。前世を信じる人々は、人間が、少なくとも人体には還元されない存在としては、原子の集まりであることからして信じていないだろうからだ。しかしかの現象について、科学の側からの解釈、説明を与えることはできても、それで「オカルト」を説明したことはない。むしろ説明しようとしてエネルギーをつぎ込めばつぎ込むほど、強固に説明を拒むのが「オカルト」だと言ってもいい。科学に反すればこそ、オカルトの信憑性は高まることになるのだ。また「科学的な」説明がつけばついたで、その事例だけがオカルトから除外されるだけのことだ。前世の存在を否定するために科学の法則や原理がもちだすことは、むしろそのために、あちらを信じるか、こちらを信じるかという選択の問題に帰着させてしまう。ここに例としてあげた大槓的な否定のしかたは、せっかく科学がもっている客観性のよそおいが、実は個人的情念の上になりたっており、その意味ではオカルトを選択することと同列であることを、はからずも明らかにしてしまうという意味で、戦略として失敗するのだ。しかし科学者の言説は、往々にしてこういう形になりがちだ。<sup>10</sup>

科学は「私」としての個は捨象してしまうのが約束であり、そこにこそ価値がある。<sup>11</sup> オカルトは客観化できない個を扱うところに価値がある。両者は、そもその規約が異なった、別世界である。そういう意味では、断絶を断絶として認めなければ、何も見えないものなのだ。にもかかわらず、現代では、オカルトも科学も、容易に視野の中に入ってきて、見えてしまう。つまり、土俵が異なっているにもかかわらず、同じ「場」を共有しなければならない。ディシプリンやイニシエーションの違いとは関係なく、スーパリーの棚に並べられているかのように、同列のものとして並べられ、品定めされている。

## 構造的問題としての「理工系ばなれ」

現代の断絶は、そういう状況の中での断絶である。そこで必要なこと、というよりむしろ退けなければならないことは、頭からの不信、頭からの受容である。そういう意味では、科学論として「何でもあり」を唱えたファイヤーアーベントは、戦略的に正しい。また、

科学は経済的利益があるのだから、今や科学は、ほとんどその根拠だけで正当化されつつある。科学は我々の世界観に刺激を与えて驚かせるという事実は、たいしたことではないと脇に置かれている（ポール・デイヴィス、物理学者）<sup>12</sup>。

といった危機感、あるいは、

科学は技術革新の基礎だ——実際そうだが——と言って人々を科学に引き入れないこと。学校にいるときは、それはあまりにも特殊で遠い先の話だからだ。しかし、これは我々が今考えていて、だんだん進歩している大きな問題で、君もこの問題に答えるのに貢献できるんだと言ってやれば、それが科学を生き生きしたものにすることになる（ジョージ・エフスタチュー、天文学者）<sup>13</sup>。

といった提言も、事実認識、戦術として、少なくとも理念的には正しい。今の「理工系ばなれ」の本当の原因は、科

学がその本来の価値を追求すればするほど、それに合わないものを切り捨てざるを得ないということであり、科学が何かを説明するということは、科学が説明しない部分を明らかにすることであり、科学は知れば知るほど、参加できない人を増やしてしまうということであり、そして何よりも、そういう構造的な問題を、おそらく科学の世界自身がそんなには自覚していない、あるいは外に向かって自覚させようとしていないということなのだ。

### 当面の課題

フランスのエリートたちは、いささか怠惰な大衆の労働とテクニックに支えられ、自由や平等といった抽象概念を明晰な言説として虚空に織り上げ、世界中に発信してきた。近代科学技術の言説も決して例外ではない。それはたしかに、「普遍」の装いをまもってはいるが、より根源的には、特殊な歴史的状況のもとで生まれた文化的な営みだったのである。いうまでもなく、それを受容した日本の科学技術も特有の歴史的・文化的ゆがみを持っている。科学技術も現実の人間の生活や価値観を離れてはありえない。にもかかわらず、私たちの周囲には、ナイーブきわまる「普遍的科学技術の進歩」信仰に支えられ、断片的知識の紹介に終始する薄っぺらな科学技術情報が満ちあふれている。いま必要なのは、「言説としての科学技術」の基層を問ひかける知的作業なのである。私たちの科学技術に癒やしがたいほど欠けているのは、そういう歴史的批判意識ではないだろうか（西垣通、情報科学者）<sup>14</sup>。

本書をゆるやかに貫いている通奏低音ともいうべきモチーフは、科学を御神体として後生大事に抱え込

む哲学的傾向に見られる〈中略〉「俗悪」さに対して反措定を提出することである。むしろそれは、現代科学の目ざましい成果を否定することでもなければ、また無定見な「反科学」の旗を振りかざすことでもない。

問題はあくまでも科学の「自己理解」の次元にかかわるものであって、科学理論の「具体的内容」に関わるものではない。私が目指そうとしているのは、「窮極の真理」として聖化された科学的知識を頂点とする「知のヒエラルキー」を解体することであり、そうした位階秩序を支えている「客観性の神話」を非神話化することである。それは同時に、科学哲学を「科学の婢」の地位から解放し、それに「科学的理性批判」という本来の哲学的課題を遂行させることにつながるであろう（野家啓一、科学哲学者<sup>15</sup>）。

科学技術を受容する側は、確かにそれを言説あるいは物語として受容するのだ。我々が何かを理解するということは、結局は、言説化することであり、物語化することである。科学技術の言説が特殊であるとすれば、受容されるという意味で私的な物語を、「客観性」とか「普遍性」といったスタイルで提供しなければならぬという点である。現代の制度の中で行なわれ、それゆえ個人性をますます奪われているように見えてしまう科学は、流行としてのオカルトという魅力的な選択肢といっしょに並べられ、ますます不利な状況に追い込まれているようだ。そこで必要なことは、科学技術の優越やそれによってもたらされる利益を声高に叫ぶことではないはずだ。むしろ科学技術の発する言葉が、意図通りには伝わらない、あるいはそもそも受け入れられなくなってしまっていることを直視することなのだ。たとえば、「ニュース」という形でさまざまな科学的「発見」が伝えられる。しかし実際にはそれは途中経過でしかなく、確定した事実ではなかったりする。それでもニュースとして世間に伝われば、世間的には事実扱いされることがある。そうした「ニュース」（ノヴェル？）の完結性と、どこまで行っても途中でしかない現実とのずれのあり方と

いったことを考えてみる必要がある。あるいは、倫理を「科学的」に基礎づけようとする試みがあり、それは往々にして科学が先行する形で行なわれる。しかもそれが「科学的」であるが故に、説得力をもってしまふ（反論が困難になる）といった面がある。そこには一定のレトリックがあるだろうし、もちろん科学の独断を拒否する側にもそれはある。こうした現実もまた科学技術をめぐる言説の流れ方に由来するものだろう。あるいはまた、科学の用語と日常の用語のずれや、逆にメタファーとしての利用という現実もある。日本語の中で考えれば、ほとんどの場合、原語を使うか、翻訳語としては非日常語的な訳語をあてざるをえない（つまりいづれにせよ、もともと科学用語が日常語からずれている）という事情もある。それが、たとえばポピュラーサイエンスのあり方に関係してくるかもしれない。

もちろん、断絶されたかに見える科学技術と文化をつなごうとする様々な構想、試みがある。<sup>16</sup> それらを手がかりに作業を進めて行く他はない。さらに筆者は、科学者でも人文学者でもなく、その意味では、両者の成果をかつさうって自らを養う、セールの言うパラジットそのものかもしれない。<sup>17</sup> しかしたとえそうだとしても、パラジットとしての「私」の言説を、とりあえず紡いでみるしかない。それがこれから当分の筆者の課題である。

## 註

- 1 たとえば、*New Scientist*, 4 December 1993 の社説は、まさにイギリスにおける「理科の不人気」を論じている。
- 2 C. P. Snow, "The Rede Lecture, 1959", in *The Two Cultures* (1959 / Cantio Edition, 1993. Cambridge University Press), pp. 14-15). なお、邦訳として、松井巻之助訳『二つの文化と科学革命』（みすず書房、一九六七年、第三版、一九八四年）があるが、この部分は拙訳による。

3 マックス・モリス「マルキストからの解答」（前掲『二つの文化と科学革命』所収の邦訳、一八六〜七頁）。

- 4 Clive Rassin, "A tale of two cultures", in *New Scientist*, 26 June 1993, p. 47.
- 5 ウォルター・アレン「文化の分離」(前掲『二つの文化と科学革命』所収の邦訳、一九二頁)。
- 6 Clive Rassin, *op. cit.*
- 7 *Ibid.*
- 8 筆者は、科学的な物語の組み立ての方に魅力を感じる側の人間である。ただ、筆者が言っているのは、あくまでも「魅力」についてのことであって、「正しさ」についてはではない。むしろ、「魅力」が容易に「正しさ」に重ねられてしまうところに、関心を向けるべきなのではなからうか。それもまた、「おもしろい」物語がもつ力なのだろう。
- 9 大槻義彦「だから、私は超能力・霊能力を批判する」|| 呉智英監修『オカルト徹底批判』(朝日新聞社、一九九四年)所収、九二頁。ただし、この記事は、談話の構成によるものである。
- 10 もちろん、流行しているような、いわゆるオカルトを否定することが、何から何まで無駄だということつもりはない。トリックや虚構をオカルトと安売りすることは、これもまたオカルトの本来の価値を無視した行為であり、容認することはできないからだ。
- 11 科学が無私の普遍的な活動だということではない。科学も特定の価値観に従属するという意味では秘儀的な側面をもっているし、個々の科学者・技術者に見れば、個人的な関心を扱い、しかもそれを自ら説明するという幸福な位置にすることもあろう。しかし、筆者が見ているのは、そういう営みの上に成り立つ科学が、社会と接触する際の問題である。科学者が個人的な関心を追いかければ、それはそれで他人からは遠ざかるだろうし、共有される知的体系としての公のものになればなっただ、その分、受けとる「私」との関係は薄められざるをえないという構造のほうである。

- 13 *Ibid.*
- 14 西垣通「仏の科学技術に学ぶもの」(朝日新聞夕刊、一九九四年五月二七日)。
- 15 野家啓一『科学の解積学』(新曜社、一九九三年)、iv～v頁。
- 16 いくつか例をあげれば、もちろん、セールの知の統合の試みもその中の一つだし、最近では、ニース大学での、ジャン＝マルク・レヴィ＝ブルボンらによる雑誌 *Alliage* (社会と科学技術と文化が融合した「合金」といった意味あい) を中心とする試みがある。
- 17 Michel Serres, *Le Passage du Nord-ouest* (Hermès V), Les Éditions de Minuit, 1980, p. 17 (青木研三訳『北西航路』法政大学出版局、一九九一年、一〇頁)